

東アジアドラマ作家会議

釜山港の夕陽が目に焼き付いている。そこには同じ放送台本に携わる者たちの熱い連帯があった。韓国、中国、台湾、香港、日本東アジアの様々な地域から参加した放送作家たち。不思議なことに今、最も揺れ動いているはずの日本とアジアの国々の放送作家たちが集まりながら、尖閣列島も、竹島（独島）も靖国問題も話題になることはなかった。

みんな意識的にこうした問題から避けているような気がした。

それは初めて開催されたアジアの放送作家、最大のイベントを成功させたいという思いもあったろうが、それ以上にこの会議のテーマである「ドラマから見たアジアの同質性」にも見られるように、不毛な政治的議論よりも、アジア人として共有できる文化や生き方を見いだして行こうという姿勢が強かった。

お互いの違いを見つけ出して、その正否を議論するよりも、同じ人間として、その喜怒哀楽をドラマという形で表現しようとする作家たちの前向きな態度が、言葉の壁を越えて熱い信頼と友情の時間を作り出すことが出来た。

そうした中でも中国と日本の作家たちの間に見え隠れする微妙な温度差や、それぞれの国ならではの複雑な政治状況を垣間見たが、それは当然だ。

会議二日目の夜「北朝鮮テポドン打ち上げか」というニュースが流れた。

翌日韓国人スタッフに聞くと

「ハイ、私もそのニュース見ました。北朝鮮がミサイルのテストをするそうですね」

日本では18日にも打ち上げか？その時は日米で経済制裁を含む厳しい対応をせざるを得ないなどと報じられているのに対し、韓国人の多くはいたってクールに

「北朝鮮がミサイルのテストをするそうですね」

という答えが返ってくる。

中国からはヴィッキー・チャオ主演の「京華煙雲」が発表された。これは林語堂の長編小説「京華煙雲」が原作でその冒頭に

「本を書き終えた途端、涙が流れてきた

抗日闘争した人々にこれを捧げたい。

英雄達が流した熱い血がなかったら

中原にはひとりの自由民もいなかったであろう」

と書かれているように主人公姚木蘭の波乱に満ちた女の一生を描きつつ、その潜在的なテーマは反日だ。

全44話からなる中国版大河ドラマと言えるもので、発表された第一話は1900年、日本軍が北京を占領して、清朝の光緒帝が北京から遷都。それに伴って北京の名門一家も避難を余儀なくされるシーンから始まっている。

僕は日本側を代表して質問にたち

「原作では主人公の木蘭が抗日運動に参加していくまでが描かれているのですが、全44話におよぶドラマでは木蘭という女性としての生き方に主眼を置いたのか、抗日運動の英雄という視点で描いたものなのか？」

という問うた。

それに対して反日には全く触れず、僅かに

「中国では一人の女性の人生だけにしぼったドラマは放送されない」という答えが返ってきたのみだった。

二日目には日本から中園ミホさんの「やまとなでしこ」が発表された。高視聴率を稼いだ月9のドラマだけに御存知の人もあるだろうが、貧しい家に生まれた主人公の桜子が「金がすべて」と金持ちの男を捜し求める話だ。

この作品も事前に退廃した日本文化を象徴する作品などという厳しい中国からの評価があるかもしれないと思ったが結果は「経済発展を続ける我が国はおおいに共感を覚える」と言った嬉しいような物足りないような回答だった。

このように今回の会議が喧々囂々、口から泡を飛ばす会議にはならなかったが、前述したように、何とか共通点を見つけ、何とか友好を深めたいという参加者の思いが、全体を制した。僕は第一回の会議としてはこれで良かったと思っている。

それにしてもこれだけビッグな大会を主催し、準備を進めてきたアジア文化産業交流財団や韓国放送作家協会の御尽力には敬服する。

釜山市主催の船上クルージングパーティといい、一般の人は利用できないと言われるあのAPECの会場でのディナーパーティなど、参加者に誇りとステータスを感じさせるに十分な魅力的な仕掛けだった。

出来得ればこの東アジアドラマ作家会議を単年度のイベントではなく、恒例化を願わずにいられない。

東アジアドラマ作家会議日本側世話人
常務理事 南川泰三